

実は奥深い「～てやる」の世界への誘いとその新しい意味の提案

(A deeper look at the giving-receiving auxiliary verb “te-yaru”)

いわゆる「できる日本語学習者」の作文や会話を何か自然ではないと直してあげる文法の筆頭の一つにあがるのは補助動詞の「やりもらい」ではなかろうか。特に「～てやる」は既に「やりもらい」の課からは外れ、「げんき」でも21課にひっそりと”to give (to pets, younger siblings, etc.)”と出ているだけである。確かにこの受給関係を示す「やる」は聞く機会が減ってきているものの、それ以外の「～てやる」は現実社会を闊歩し、非母語話者の日本語理解に混乱を招いているに違いない。本発表では、そんな「～てやる」の持つ意味に焦点を当て、これまでの研究の成果や問題点を探り、新たな意味の提案をしたいと思う。

豊田(1974)は相手にマイナスの利益を与えるかもしれない「～てやる」、例えば「邪魔してやる」について主体の動作の方向性を示す役割をすると述べ、働きかける対象がない「～てやる」は自己の意志を表すとしている。劉(2022)によれば、山田(2004)はさらに「～てやる」の動作から何らかの影響を受ける対象がない独り言の「少々かせいでやろう」を受影者非存在型と切り分けて論じている。

部田(2011)は「～てやる」を「動作主の働きかけによって被動作主(受影者)に何らかの変化が起こる」と定義した。「ひまだからその辺を歩いてやった」のような受影者のない意志の「～てやる」も動作主(=話し手)に精神的な変化を起こすものだとし、またその場合は話し手の望む変化でなければ成立し得ないと述べている。

筆者は、しかし、話し手の望まない変化であっても意志の「～てやる」文が成立する場合があると考えた。本発表では、その例を挙げて、参加者と共に「～てやる」の奥深い世界を楽しみ、日本語学習者の一助となれればと願う。

参考文献

- 豊田豊子 (1974) 「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」日本語学校論集 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校 紀要論文 77-96
- 部田和美 (2011) 「テヤルの意味分析—非恩恵を表すとされるテヤルを中心に」言語学論叢オンライン版第4号 16-29
- 劉寧輝 (2022) 「日本語授受表現に関する研究概観と今後の課題」言語文化研究 第1号 69-86